

文化論集第57号
2020年3月

消 息

猪股正廣先生をお送りするにあたって

猪股正廣先生は、2020年3月末をもって早稲田大学を定年退職されます。先生のご退職にあたり、商学部教職員を代表してご挨拶させていただきます。

猪股先生は、1975年に早稲田大学政治経済学部政治学科をご卒業後、同大学院文学研究科独文学専攻博士前期課程・後期課程に進学されました。同課程を1980年に満期退学され、さまざまな大学で非常勤講師をお務めになった後、1985年に商学部専任講師に着任され、1988年助教授、1993年に教授に昇任されました。

学内においては、1992年から1994年まで、学生担当教務副主任をお務めになりましたが、この時期は、商学部において「自称自治会」を排除し始めた時期でした。そのため、学部執行部と自称自治会との交渉はかなり荒れたものとなり、猪股先生と学生担当教務主任の片山覚先生は、旧11号館内にあった学部応接室に閉じ込められたこともあったと聞いております。そうした猪股先生はじめとする先輩の諸先生方のご尽力により、商学部が正常化したといえます。

先生の研究業績につきましては、本号に原口先生が寄稿された消息をご参照頂きたいと思います。先生が、学部時代の専攻である政治学からドイツ文学に専攻を変えられた事情・動機について伺ったことはないのですが、時代の変化も少なからず影響していたのではないかと推察します。すなわち、先生が学部生活を送られた1970年代初頭は、1960年代に盛上った学生運動が、急速に変容・沈静化していった時期であり、こうした時代背景のなかで先生は、社会現象を対象とする政治学から、人間の内面をより重視する文学に興味が移られていったのではないかということです（これは一つの仮説的命題にすぎませんが）。

先生の教育者としての姿を一言で要約するならば、「厳しい先生であった」ということになると思います。ただし、これまで学部執行部として仕事をするなかで、先生の担当科目の成績評価等に関して、学生から苦情がきたことは1回もありませんでした。そ

れは、先生の厳しさは、言葉を換えれば厳格さであり、学生もその点は納得・理解しているからだと思います。いま述べたような事柄についても、原口先生ご執筆の消息に、ユーモアを交えて紹介されているとおりです。

猪股先生が批判精神・反骨精神旺盛であることは、多くの学部の先生方がご存知だと思いますが、近年は以前に比べると、だいぶ発言は控えておられるように見受けられます。しかし、一昨年に本部から受講要請のあったウェブ上での「研究倫理教育」受講については、最後まで反骨精神を貫き、副総長と面談（抗議!?）することで、受講を了断されたのは、面目躍如というところでしょうか。

先生は、政治学から文学に専攻を変えられましたが、政治学であろうと文学であろうと、その根本の部分では、人間に関する洞察力が求められます。そうした洞察力に関して先生は、文学者のなそれだけでなく、政治学者的な嗅覚の鋭さをお持ちであったと思います。それゆえに、先生の卓見を間接的に伺い、学部運営の参考にさせて頂いたこともありました。

先生とは専門領域も異なり、学部内の業務でご一緒した機会もそれほど多くはないのですが、なんとなく波長が合っていたと感じております（先生がどう感じておられたかは、分かりませんが）。そうした先生が学部を去られるのは、寂しい気持ちがあります。

猪股先生は、12階の研究室フロアでお会いしても、足早にしかし悠々と歩いておられ、健康上の問題はないようにお見受けしますが、大学の規程により、この3月をもって定年退職されます。しかし早稲田で授業を担当されなくなっても、専門のご研究や朝鮮語学習等に勤しまれるのではないかと思います。むしろ、組織の束縛から解き放たれて、学生時代のように自由な時間を謳歌されるように思います。猪股先生が、今後とも健康に恵まれ、いろいろな事柄に挑戦できることを祈念するとともに、先生のこれまでの早稲田大学とくに商学部に対するご貢献に深く感謝申し上げて、私の送別の辞とさせていただきます。

早稲田大学商学部長
早稲田商学同攻会長
藤田 誠